

Into my Packet



後藤滋樹の

新・社会楽

後藤滋樹 (goto@ntt-20.ntt.jp)
日本電信電話株式会社
ソフトウェア研究所

第7回 タナカさんは銀行家

【バンコックでの経験】

私は今年の1月の中旬にAPNIC(アジア太平洋ネットワークインフォメーションセンター)の会合のためにタイを訪れた。その際に田中清さんと一緒に旅行したのが話の発端である。実はタイ語で「タナカーン」というと「銀行」の意味になる。それを知った我々は、バンコックの夜の飲み食いを田中銀行に頼ったのであるが、このジョークはタイの人にもちゃんと通じた。

このような単語が他にないかということで、小林豊編著「日タイ・タイ日初級辞典」(小林株式会社、タイ国)という辞書を眺めてみると、アライさんやタマダさんもタイ語では必修であることがわかる(「くらタ」の先頭のひらがなは同辞書の表記法によるもの)

何 (what)	アライ
中華鍋	くらタ
普通	タマダー
なぜ (why)	タマイ

また「キーレー」というのは「醜い」ことであるとか「く라이」とは「近い」ことであるが「くらイ」では「遠い」ことだと書いてある。このような単語を並べてバイリンガルの駄洒落ができそうだ。

【本当はどっちなの】

さてタイ語で一番最初に覚えるべき単語はサワディー(こんにちは)であるという。これだけは覚えて日本に帰国した。ぜひタイの友人へのメールでサワディーを使いたいものだ。でもタイに出すのにカタカナでは通じない。それでは、というのでタイ語の会話の本を見てSawatdiiと書いて送ってみる。すると返事にはSawas-deeと書いてきたぞ。



アユタヤの涅槃仏

まあ通じればどっちでもよい、と構わず仕事の話が続ける。本誌でも紹介してもらった国際会議がタイで開かれる(時間に余裕のある人は、ぜひ<http://www.cs.ait.ac.th/conf/acsc.html>を見て下さいね)。その会場のある土地は、日本語の観光ガイドブックにはPathum Thaniと書いてある。しかし現地からはPratumthaniと書いてくるなあ。

そのPathum Thani(つまりPratumthani)の近くには、山田長政で有名なアユタヤがある。日本語のガイドブックを2、3冊見ると、どれにもAyutthayaと書いてある。でもタイからのメールの中ではAyudhyaとくる。

どうも、これは日本語のローマ字でいえば訓令式とかへボン式のような差異があるのではないか。その疑問をタイの友人だけでなく、米国人や日本人でタイ語に詳しい知人に尋ねてみる。結論だけを書くと、どうやらタイ語の表記のルールは一筋縄ではいかないようだ。それでもあまり不便でないということは、タイ文字の習得は意外に簡単なのだろうか。そうは見えないけれども。

【英語だけでは済まないアジア】

さてAPNICのようなネットワークインフォメーションセンターでは、たとえばIP(インターネットプロトコル)アドレスの割り当てが重要な仕事である。アドレスは世界中で重複なく割り当てなければならぬ。そのために肝要なのはデータベースの整備である。つまり割り当てずみのアドレスをきちんとデータベースで管理しておく必要がある。

そのデータベースには、アドレスの割り当てを受けた組織名や住所、担当者の人名などの固有名詞が登録される。もしデータベースに英文字と数字しか登録できないとすると、上のタイのような場合には、ちょっと困る。違う表記法がうまく変換できるのなら、まだ救われるのだが、やはり現地語で登録できないと問題が発生するだろう。

インターネットが普及すると同時に、英語で書かれた情報が世界中に拡散しているという指摘がある。それは正しい観測である。また一方では電子メールやWWWで英語以外の言語を使う工夫が進められている。これも現実である。この小文ではインターネットを支える側のネットワークインフォメーションセンターでも「英語以外の言語」が重要であるという事例を述べたつもりである。

こんなことを考えながらアジア関係の別の会議に出ていたら、マニラから来た人にこんなことをいわれた。「後藤さん、GOTOを食べたことがありますか。え、ちょっと待ってくださいよ。GOTOというのはフィリピンでは食物なの？」



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp